

## 最果てに、どっかい生きている

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

中国西南部にある雲南地方は、中央から取り残された最貧困地域である。海拔三二〇〇以上の高地にあるこの村に電気が来たのはようやく二〇〇七年になつてからのことだ。痩せた土地で穀物が育たず、ジャガイモが村の人間と家畜の豚の主食である。

全部で七〇戸ほどのこの集落に暮らす、三人の幼い姉妹の記録映画である。長女インインは一〇歳、三年前に家を出た母親の代わりに二人の妹たちチェンチェン（六歳）とフェンフェン（四歳）の世話をしている。父親は町へ出稼ぎに行つており、近くに住む祖父がときどき様子を見に来たり、伯母の家で一緒に食事を与えられることもある。が、日常は三人暮らしだ。

土壁に藁葺きの家の中は、暗く湿っている。インインは毎朝、妹たちを起こすと、ジャガイモをゆでて朝食を用意し、豚にも餌を与える。ちよろちよろ出

る井戸水で洗濯をしたり、畑にキャベツを取りに行つたり、と忙しい。寡黙で無表情。友達もいない。栄養失調のせい、一〇歳の女の子にしてはか細く小さく見える。それでも、妹たちが喧嘩すると声を荒げるでもなく注意したり、末っ子の訴えにはうなずいてやるなど、立派に母親代わりを果たしている。

音楽もなく、ナレーションもなく、恐らく据えっぱなしのカメラはただひたすらインインら三姉妹の暮らしぶりを写し続ける。高地の風を背に受けて、岩にぽつんと腰かけているインイン。ふと、日本映画『誰も知らない』の、東京のマンションに置き去りにされた四人兄弟姉妹の一二歳の長男の姿が重なる。大人社会のしわ寄せを、全身で受け止める幼い「父」や「母」役の少年少女らの、しかし、何と健気でたくましいことか。二時間半を超える長編だが、長さなど忘れて、どっかい生きている子どもらの姿

から目が離せない。

突然、父親が戻ってきた。今度は下の妹二人を連れて、また出稼ぎに出かけると言う。都会では生活費が高くて、お前は連れて行けない。おじいちゃんと家を守っていてくれ、と言われて素直にならずにインイン。留守番よりうれしいのは学校だ。その日の授業は、京劇のスーパースター、梅蘭芳について。北京とも京劇とも無縁の最果ての地で学ぶ、華やかな女形姿の梅蘭芳の生涯。インインは自宅に戻っても、一生懸命自習している。この取り合わせがスーパード!

父親が再び、二人の妹と一緒に見知らぬ子連れの女性を連れて戻ってきた。その女性がいたずらな次女に手を挙げている姿もカメラは捕える。やれやれ、子どもらはこれからどうなる? 悲惨と言えば悲惨だが、その原因をえぐり出して世に問う告発的社会派映画ではない。困難や孤独にもめげず、淡々とやるべきことをこなしてゆく少女の頼もしさ。だが、大人はそれに甘えてはいけない、との思いが伝わってくる。

この映画は、世界第一の大国をめざして猛烈な勢いで発展を続ける中国の、もう一つの現実である。圧力を怖れず、あえてこういう側面をしっかりと記録に留める王兵監督に敬服する。

### 『三姉妹～雲南の子』

フランス・香港合作 ドキュメンタリー映画(153分)

監督: 王兵(ワン・ピン)

公開中

© ALBUM Productions, Chinese Shadows

